二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 綾守竜樹
挿絵 柴刃俊郎

残夢 009
第六章 城塞の女戦士 025
第七章 淫獄の五姫星――戦士と聖女と賢者 087
第八章 悪夢の戦女神 151
第九章 淫獄の女騎士 223
終章 269

登場人物紹介

Characters

アリス

本名アリスフェルト＝マールブルク。元は半自由民の農民。女帝に憧れて騎士になろうと決意する。聖鏡騎士団員に叙任され、初任務に赴く。

ヒルダ

本名ヒルデガルデ＝ファナ＝ヴァーンスタイン。ファース教会祓魔省所属の女司祭。男尊女卑的な貴族社会が嫌で、リーヴス尼僧院に逃げこむ。覚醒の祈りに非凡な才を示す。かなり気位が高く、何かにつけて周囲を見下しがち。

エフィ

本名エフェミア＝アンスヴァール。熱烈な信仰心ゆえ5歳にして誓願、アーガス尼僧院に入る。強力な覚醒と癒しの力を授かり、「聖母の愛娘」と讃えられる。大悪魔退治のためにアデル軍に合流し、後に「夜明けの五姫星」と呼ばれるようになる。大悪魔とアーガス迷宮で戦い、英雄的な最期を迎えたとされる。

ノイン

本名ノイベルローゼ＝ファナ＝オーベルザルツ、またの名を「双頭の大賢者」。10代半ばで著書を出した天才魔術師。長らく自城に閉じこもって過ごしていたが、アデルに請われて征伐軍に参加。魔術師ならびに軍師として辣腕を振るい、「夜明けの五姫星」の１人に数えられる。アーガスにて戦死したとされる。

ルーティエ

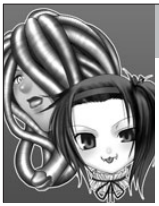
本名は発音不可能。嫉妬を司る大悪魔「果てしなき自虐」と人間の女とのあいだに生まれた半魔族。すでに500年以上生きており、「永劫の傍観者」と呼ばれていた。アデルらと戦って敗れた後、征伐軍の仲間入り。魔族としての特殊能力を振るって、「夜明けの五姫星」の１人になる。アーガスにて戦死したとされる。

シュナイダー

本名不詳。大剣を振るう女傭兵として名を馳せ、その赤髪から「炎の千人斬り」と呼ばれた。アデルら指導部といさかいを起こしながらも指揮官に昇りつめ、後に「夜明けの五姫星」の１人に数えられる。アーガス迷宮の戦いで英雄的な最期を迎えたとされている。

アデル

本名は、アーデルハイド＝ファナ＝グラスベルガー。大悪魔の征伐軍を指揮し、「夜明けの五姫星」の代表として国家的な英雄になる。アーガスの迷宮戦で唯一人だけ帰還、帝都に凱旋する。万民に支持されて、帝国初の女帝として即位する。



淫夢の女王（インキュヴァーリン）

大悪魔「破戒せる情欲」が休眠前に生んだ悪魔三体の１つ。淫らの情念を受肉させた悪魔。休眠時は少女の姿、覚醒時には上半身は妙齢の美女で下半身は大蛇という化け物姿。特定の生け贄に固執し、相手に徹底的に依存したがる。

姦淫聖職者（ニコライムス）

大悪魔「破戒せる情欲」が休眠前に生んだ悪魔三体の１つ。淫らの教義を受肉させた悪魔。休眠時は老聖職者の姿、覚醒時には骸骨と影の化け物姿。あらゆる対象に淫欲を植えつけて、その自律的な稼働を促す。

破戒せる情欲（ブロッケンフリューデ）

ファース聖教が貞潔を強調しすぎたがゆえに生まれた大悪魔。聖書の記述から、おそらくは最後の大罪であろうと言われている。あらゆる人間に淫夢を見せて魔族化させ、聖教圏を存亡の危機に陥らせる。アデルらの征伐軍により、アーガス迷宮の底で眠りに就かされる。

『第六章　城塞の女戦士』より

その語尾は音階を踏みはずしていた。
「うふふ……ほら出番よ、エセ坊主」
滅ぼされかけた淫魔が、滅ぼしかけた女の背後に迫っていた。闇の粘体が年老いた蛇のようにのたくり、生ける彫像と化した戦士に子どもの腕ほどもある触手を伸ばした。

※

「……ッ！」
叫び声をあげるのは、かろうじて免れた。
「アリス、いまの反応を見たわよね？」
肩で息するシュナイダーの耳に、かつての仲間による当てこすりが飛びこんでくる。
「先ほどまでとは大ちがい。胸を揺らさないよう慎重に動いて……まるでご令嬢が踊っているみたいよね」
赤毛の女戦士は、もはや歯軋りを隠さなかった。眉間の皺から玉の汗が流れおち、鼻の頭を踏み台にして飛びおりていった。
『おや、よそ見をしていていいのか？』
形勢を逆転してもらった姦淫聖職者が、緩慢に触手を伸ばしてくる。
「……く……クソがっ……！」

剣の一振りが、禁断の重労働だった。歯を食いしばって、ヨタヨタと距離を取る。
「うふふ、じっくりと責めてやって」
ルーティエが底冷えのする声で呟いた。獲物を前にした蛇の目つきでこちらを見、一転、妹を導く姉の微笑みでアリスを眺めやる。
「ほら、あいつの胸当（ブレスト）に注目して……やたらとゴツいと思っていたでしょう？　あいつの双娘は、ああして外から拘束していないと好き勝手に悦びを貪ろうとするのよ」
意味深な目配せが発せられ、合図を読みとった淫魔が無数の触手を伸ばしてきた。
つかまりはしなかったものの、かわしきることはできなかった。回避ぎわに剣を叩き落とされ、胸当の留め具を壊されて、
「……くっ！」
重い武具が、中身の充実ぶりに押されて跳ねとんだ。お目付役から解放された双乳は、雨後の大地よろしく蒸れあがり、鎖骨のしたに広大な裾野を生みだしていた。胸元に夜風が流れこんできて、火照りきった肌を優しく慰撫される。
鎧のしたに着こんでいるのは、襟ぐりを深く切れこませた肌着だけだ。露わにされた谷間から乳房の両崖にかけて、異様な模様が生きているかのように脈動していた。
鏡合わせの螺旋に、それぞれ三本ずつの枝と四つの目――。
『ふふふ……おまえのたくましい女体には、我が父の祝福がひときわ映えるな』

姦淫聖職者の本体が、右腕を掲げる。ボロボロに砕かれた骨の端から、闇色の触手が蛇のヌルつきを模して伸び、露わになった女体の中央に群がってくる。シュナイダーは薄氷を踏むような所作でかわそうとして、

「……ッ！」

乳房が、揺れた。

ほとんど押さえられていないに等しい双娘は、細心の注意を払った一歩でも量感の責任を取らされ、白衣をあからさまに波打たせた。思わず肩をすくめ、眉根を上下させてしまう。眼のまわりが熱くなる。

「……シュ、シュナイダー……さまっ？」

アリスの驚きが耳に滑りこんでくる。何も知らない他人が見れば、自分の反応は異常な脆さとしか見えないだろう。絶望的な自嘲の念が、乳肌と下着の生みだすかすかな摩擦感を増幅させ、胸の奥をうるさく掻きむしってくる。

「ほら、いやらしい顔をするでしょう？　あいつにとって、胸を揺らされるのはね」

ルーティエがアリスの下腹に手を這わせた。外套代わりの旗を掻きわけ、臍の穴を撫で、なめらかな曲面を擦って、濡れそぼった股布の内側にするり、と滑りこませる。

「ひっ！　ル、ルーティエ様っ！　やめてくださいっ！　やめ……ッ！」

「こ、れ……罪の芽を揺すぶられているのと一緒なのよ」

股布に刺繍された螺旋十字の陰で、貞潔を刮ぎおとす指戯がくり返されているらしい。アリスは顎を跳ねあげてのけ反り、自分を責めているはずの相手にますます背を密着させていた。

「あいつがどんな悦びを味わっているのか……あなたにも実体験させてあげるわ」

『ならば、こちらも張りきらねばならんな』

姦淫聖職者も、負けじと触手を伸ばしてくる。

かわせない。

今度こそ拘束される、シュナイダーはそう覚悟した。だが、闇の蛇は胸を覆う下着を剥ぎとっただけで、またしても退いていた。

「言ったでしょう、じわじわやるって……」

アリスの股間を揉みしだきながら、ルーティエが低く笑った。

「……ほら、アリス。ちゃんと見るのよ」尻尾の先を涎まみれの頤に巻きつけ、ぐらつき続ける首をむりやり固定させている。「剥きだしになったあいつの乳房……どうなっているのか教えてくれないかしら？」

「……く……ルーティエっ！」

思いだす。この半魔（ハルダスト）は、いやらしい仕打ちを考えつく天才だった。いまも第三者の口を介して語りきかせることで、こちらの屈辱感を煽ろうとしている。

「……ああ……そ、そんなこと言えな……」
アリスの呼気が止まり、不意に爆ぜた。
「……あーっ！」
股布のなかで苛烈な指責めが為されたのだろう。哀れな虜は腰を浮かせ、太腿に激しい震えを走らせた。
「ああっ、だめぇ！　そ、そこっ！」
「アリス、教えてくれないかしら？」
「そこっ、つ、つまんじゃだめぇっ！」
「教えてくれるわよね？」
蜜を垂らすように囁きながら、耳穴を舐り、耳たぶを噛む。震える頬を撫で、涎に濡れた唇をさする。
「うああっ、ああっ！　は、はいっ！　はいいっ！」
布越しの狼藉が穏やかになり、奏でられる水音も小さくなった。アリスは怯えたようにわななきながら、観察結果を言上した。
「……シュナイダー様の……ち、乳房は」しゃくりあげが続いて、「お、大きくて……きれいです……ち、力強さとふくよかさ……対になるはずの褒め言葉が……どちらも当てはまります……」

「意外と詩的な物言いするのね。それで先の方は？」
「……さ、先は……薄桃色で」荒い吐息の合間に、本物の驚きが差しはさまれた。「ひ、引っこんで……います……」
「うふふ、あいつの乳頭ってヘンでしょう？」ルーティエはアリスの頬に舌を伸ばして、流れおちている涙を舐めとった。「実はあいつ、乳首を陥没させられているのよ」
その口もとに、満月のときだけ咲く花のような薄ら笑いを浮かべる。
「もちろん、元からではないわ。私たちが、魔力を使って封じこめてあげたのよ」
視線と語尾が、こちらの同意を求めてきた。
シュナイダーは、ひと睨みと舌打ちで応じてやった。
「なにしろ、徹底的に嬲ったからね。あいつの乳首ったら、とってもステキな肉質に育ってしまって……息を吹きかけただけでも絶頂を弾けさせるほどの、見境ない敏感娘になってしまったのよ」
なったのではない。
シュナイダーは喉の奥で呻いた。
ならされたのだ。そのように躾られてしまったのだ。
「それだと普通に暮らすこともできないでしょ？　……だからね、魔力を使って乳暈のなかに埋めこんであげたのよ。どうだった、シュナイダー？」

「……なにがだ？」
「乳首で自慰できなかったこの半年」
「だ、誰がっ！　誰がっ、そ、そんなことっ！」
「とても辛かったのではないかしら？」ルーティエは犬歯を剥きだして、憎々しげに畳みかけてきた。「だって、いちばんの勘所だったものねえ。私に摘まれて、何百回とイキまくったわよね？　エセ坊主の触手にしごかれて、何度お漏らししたかしら？　蛇娘にふやけるまでしゃぶり回されて、泣きわめいたこともあったっけ？　破戒せる情欲に乳房ごと縛りあげられたときは、なんて叫んでいたかしら？」
「黙ってろ……」
「ああ、そうそう『もいで』だったわね、『このいやらしい魂をもぎとってえぇ！』」
「黙れぇっ！」
　真っ赤な顔で怒鳴りかえした。肺の震えが胸全体に浸透し、長きにわたって封じられている乳頭までやかましく疼かせてきた。
「……ひさしぶりに乳首でイケると期待しているのでしょうけれど」ルーティエがアリスを抱えなおし、再び、指を踊らせ始めた。つんざくような嬌声を聞きながしつつ、「まだ解いてあげないわ。しばらくは、土台だけでお預け……それでも充分躾られるわよね、エセ坊主？」

『いい加減、その呼び名をやめてもらいたいが……』
「それでも充分躾られるわよね、エセ坊主？」
『……助けてもらった身だからな……ああ、もちろんだ。我があの淫獄で、何日こいつの乳を耕し続けたと思うのだ？』
　ほぼ眼前で、闇色の触手が人の手の形に固まり始める。おぞましき蠕動（ぜんどう）の果てにできあがったのは、指の長さがまちまちで、肉の付き方もふぞろいで、さらには関節を無視して曲がりくねる「手」だった。
『そして、こいつが何百回、いや、何千回達したと思うのだ？　これほどの乳好みは二人とおるまいよ』
　淫獄の記憶が、蘇ってくる。
「……誰が……好みだったものか……」
　忘れようとしても忘れられない、魂にまで刻みこまれた凌辱の日々。胸の大きさに見合うだけ詰めこまされた魔悦が、何もされていないうちから滾々（こんこん）と湧きだして、乳肌をピリピリと痺れさせてくる。
『つれないな。だが我は、おまえの弱い場所……好きな力加減……脆い変化……すべて覚えているぞ』
「……ゲス野郎が……」

『ふふふ、華々しく鳴かせてくれる！』
無数の手が、淫猥に迫ってきた。
二本は払えた。三本はかわせた。だが六、七本目はムリだった。異形の両手が、獲物に襲いかかる蛸のように指を広げて、腫れあがった双乳を鷲づかみにしてきた。
「……ッ！」
たった一掴みだった。張りつめた紡錘を荒々しく歪められた途端、シュナイダーは過去に引きずりおとされていた。両腕が脱力し、膝がカクンと砕ける。自分の足で立っていられなくなり、情けなくも跪きかけて、胸をつかむ魔手に留められた。
「……くぁ……ッ！」
双乳で吊りあげられているような格好になってしまい、乳肉の付け根に強烈な引っぱりが走る。乳肉じたいにも食いこまれ、歪められたうえに引きのばされて、付け根と同じく痛みに近い痺れを味わわされる。
「あ、く……くそ……がぁ……」
その荒々しい刺激が、腰をビクつかせる。その人外の冷たさが、膝を笑わせる。その喩えようもないヌメりが、爪先を丸まらせる。
「アリス、ほら……お搾りが始まるわよ」
顎よりも高い位置に持ちあげられている双乳が、ゆっくりと揉みこまれた。闇色の指が

褐色の肌をたわめ、瑞々しい弾力とせめぎ合いつつ、膨らみの芯めがけて深々と沈みこんできた。
「……ああっ、うぁ！　や、やめろっ！」
逃げだしたくても足が動かず、振りほどきたくても腕があがらない。何ら拘束されていないのに、まったく抵抗できない。胸の中身を流動させられ、局所的に濃密と空疎を作りだされる狂おしさが、女体の芯まで滲みとおってくる。背筋のくねりに応じて厳めしい武装が、虫の鳴き声めいた金音を奏でる。
「シュ、シュナイダーさまっ！」
アリスは、不思議に思っているのだろう。英雄と崇められた人が、しかも、つい先ほどまで圧倒的な強者だった人が、いったいなにをしている――そう毒づきたい気分なのだろう。事情を知らない女騎士の悲痛な呼びかけは、呪われた過去と自分の無力さとを、二重の意味で噛みしめさせる責め苦だった。
「ムダよムダ。なにしろ半年ぶりだもの……乳狂いのあいつが、逃げたり拒んだりするはずないわ」
「な、なにを言ってるんですかっ！　……シュ、シュナイダーさまが、そんな……悪魔相手にそんなっ！」
「だってさ、我が親友」ルーティエの口調には、舌なめずりの跡がくっきりと残っていた。

「炎に愛された女戦士サマとしては、崇拝者たる乙女の信頼に応えなくてはねえ？」
くすくす笑いを伴奏にして、柔肉の揉みこみが激しくなる。
五方向から均等に押しつぶされ、たっぷりとした量感を乳頭にたぐり寄せられる。段になるほど厚みを増した乳暈を伸び縮みさせられ、粘膜の匂いを噴きださせられる。膨らみの芯がジンジンと疼き、尖端が痒みに近い切なさを訴え始める。
「……うあっ、む、胸を……も、揉むなっ！」
揉みしだかれる。官能の種をくまなく掘りだされ、ため息モノの絶妙さで芽吹かされる。かつての淫らな躾が養分となり、肉奥に灼熱の花を咲きほこらせる。
『どうした、言葉ではなく行動で拒んだらどうだ？　あちらで股を擦られている聖鏡殿（シュビーゲリッター）も……おまえの勇姿を望んでいると思うがな？』
双乳の深部で起きた裏切りは、次々と波及していく。封じこめてきた毒の花が、腰の裏や下腹の裡、淫魔たちの手で耕されてしまった部分に大輪を開かせる。
「……揉む、な……っ……や、やめろぉ……！」
揉まれる。
捏ねられる。
揺すぶられ――。
「……そろそろよ、アリス」

乳肉の蕩けていく感覚、アリスの凝視、ルーティエの侮蔑。様々な思いを引きおこす刺激が渾然一体となって、シュナイダーの背筋をわななかせる。短い髪を宙に舞うほど揺らせた瞬間、闇の指が乳頭を押しつぶしてきた。

「……ッ！」

背筋が、顎もろとも反りかえる。肩や腰に肉を軋ませんばかりの力が流れ、しかしすぐに緊張を上回る弛緩に喰いつかれて、ガクリとうなだれる。髪の生え際や足の付け根から押しつぶされるように汗が滲みだす。

『ふふふ、やはりおまえの飛翔はいいな。蕩けているくせに、必死で尖ろうと爪先立ちをしている』

「……ぅ……あ、ふ……ふうぅ……」

『その未練がましさ、魂の煩悶ぶりがそそるぞ』

「……うぅ……く……くそ……」

六ヶ月間、必死になって遠ざけてきた稲妻だった。自分を淫獄の囚人に戻してしまう肉の呪文が、頭のてっぺんから爪先までかけぬけている。山猫のしなやかさを見せる内腿に肉の波が伝わり、脇のしたに甘ったるい匂いがこもる。

「ほら、あれこそがシュナイダーの本性よ。自分が倒そうとしていた悪魔に、肉欲の塊を揉まれただけでイッてしまう牝牛……どうしようもない肉欲の虜……」

「……ち、ちがいます……シュナイダーさまは、そんな……そんな……」
「別に驚かなくてもいいじゃない。要するにあなたと同じ、ということなのよ……アリスも、あのエセ坊主にまさぐられただけでイッてたでしょう？」
「……！」
「それが女の限界なのよ……まあ、あいつはアリスよりも情けないけどね。ほら、論より証拠よ？」
ルーティエがアリスを説教しているあいだにも、新たな闇が伸びてきた。太さも大きさもまちまちの魔手が、我先に群がってきた。
「……ぅあ……ふ、あっ！」
両腕に巻きつかれ、両脛に絡みつかれて、身動きを封じられる。続いて乳房をつかんでいる魔手が伸びて、宙吊りの状態からゆっくりと地に下ろされる。目線が下がり、姦淫聖職者の髑髏に見下された。石畳に跪かされ、その場に腰を落とし、ついには仰向けにひっくり返された。
「うあっ、あ……ああ……ああ……」
横になっても脇へ流れない膨らみが、無数の手に啄(ついば)まれる。麓(ふもと)から頂きへと、みっちり詰まった量感を押しあげるように揉まれ、熱っぽくなった中身を攪拌しているみたいに捏ねられる。ありとあらゆる場所に舐めるような揺れが施され、形よく広がっていた乳暈が

グチャグチャに歪められる。
「……そんな……シュナイダーさま……どうして……」
アリス自身には、何の底意もあるまい。だが新参騎士は、シュナイダーの恥辱を醸しだす香草だった。そのため息に含まれている匂いが、とっくの昔に涸れはてたはずの羞恥心をムリヤリに湧きださせた。
「ああ……み、見るな……」
恥辱と喜悦が入りまじって、頭のなかと下腹の奥を一緒に締めあげてくる。頭皮が脂汗で、内腿が女の涎で濡れてしまう。
「……ああ……やめ……や……め……」
揉まれる、捏ねられる、揺すぶられる。懐かしさを感じさせられてしまう玩弄に、双乳が煮えたぎりかけている。自分を支えるモノが、ドロドロに蕩けかけている。このまま揉まれ続けたら、自分は否応なく、あの淫獄の虜囚に戻されてしまう。
「……やめてぇっ！」
六ヶ月ぶりの女口調だった。つい漏れてしまった絶叫は、アリスの息を呑む音とルーティエの鼻笑いとに迎えられていた。
「ふふっ、アリス、この程度で驚いていたらダメよ。こいつの本性は、外見の正反対なんだから……そろそろ、乳首の封印も解いてあげるわね」

ルーティエの目配せに応じて、姦淫聖職者が乳頭を包みこんでくる。闇の流体を蛸の吸盤みたいに変形させ、一気に吸いたててくる。

「ああっ、や、やめろっ！　やめてぇ！」

膨らみの頂きから肩甲骨にかけて、灼けた鉄串を刺しこまれたような刺激が走った。獰猛な痛みの裏で、痒いところを心ゆくまで掻いているのにも似た陶酔が、乳暈の底を擦りたててきた。

「やめ……ッ！」

厚ぼったく腫れた粘膜の中心が、湿地に生えた茸よろしく盛りあがる。吸いたてていた闇の吸盤をも突きやぶって、月光に照らしだされる。

「ほーら、出てきた……すごいでしょう？　あまりにも勃起しすぎるものだから、乳首の根本にも肉の段ができるのよ。乳首じたいも、人差し指の先くらいはあるの。しかも筒として長いものだから、所々不格好にくぼんだりしてね……」

半年ぶりだった。

自分の女体の一部であるにもかかわらず、出現そのものさえ悪魔たちに支配されてしまった肉芽は、ただ外気に触れるだけでもズキズキと脈打っていた。鼻の頭に皺を寄せてしまうほどの刺激を送りこんできた。

『……ひさしぶりの芳香だ。あの地の底でも、おまえの突起は牝の匂いを堪能させてくれ

たな。さらにこうすれば……』
細い触手が伸びてきて、乳首の頂きをチロチロと撫でまわしてきた。
「ああっ、だめぇっ！」
切れこみをなぞられる程度の責めに、大剣を振りまわしていた女戦士がのたうちまわらされる。首を捻じきらんばかりに振り、赤毛の短髪をバサバサと鳴らす。
『……牝の鳴き声も楽しませてくれたなあ？』
細い触手がスルスルと伸び、乳首の側面にも巻きついてきた。息みすぎてやや曲がり気味の肉筒を、段がつくほど縛りあげ、グイッと引っぱりあげてきた。
「あーっ！」
限界まで開かれた口から、炎じみた絶叫が噴きあがった。一緒に飛びだした舌が、強風に煽られる旗よろしくひらめいた。
「や、やめてぇっ！　乳首っ！　ち、乳首はやめてぇっ！」
目尻が決壊して、熱い涙をこぼしてしまう。潤みきって朧（おぼろ）にかすむ視界の隅に、アリスの呆然とした顔と、ルーティエの嗜虐的な笑顔が飛びこんでくる。羞恥と屈辱の酸が湧きだして、心の金庫に忍ばせていた復讐心まで蝕まれてしまう。
「夜明けの五姫星、千人斬……ご大層よねえ？　ほら、見なさいよこのザマを！　肉の芽を縛られただけで……あら、またイッたわね」

腰の震えを見抜かれた。
「……ぅあ！　あ、あああ……」
半年も埋没させられていた絶頂は、凄まじく蒸留されていた。胸の突起から涼やかな閃光がほとばしり、眼底を灼いて頭のなかに汗を湧かせる。快楽の伝わりに肉体の応えがまにあわず、内側の狂奔とは裏腹に控えめな痴態になったのが、せめてもの救いだった。
『なんだと？　おい、我らは口を酸っぱくして教えたはずだな？　我らが父の御許に翔ぶときは、しっかりと名乗り、聖なる句を唱えよ、と』
気づかなかったらしい姦淫聖職者が、乳首を引っぱりあげたままプルプルと揺すぶりたてきた。脂肉の詰まった膨らみは、胸板のうえで狂おしげにぬたくり、たぷたぷと弾んで甘やかな汗をとばした。
「……そ、そんなこと……シュナイダーさまが……口に……なさるわけ……」
「なさるわよ。あいつ、このテのことには本当に堪え性がないの。三回もイッたら、ただの牝に早変わり……うふふ、とても可愛いわよ」
乳首を支点にしての揺すぶりに加えて、魔手たちの揉みこみも再開される。各所を狂わす肉の攪拌が、頂きから胸板まで貫いてくる一本の振動軸に繋がって、遺漏なく秩序立てられる。膨らみの隅々までもが、厚塗りの快楽に染めあげられる。
「あーっ！　ああっ、シュナ、シュナぁ……」

「……シュナイダーさま……」
「ほらね？　こいつ、自分のことを『シュナ』って略すのよ……元が男名だけに、たまらないわよねえ」
「……イクッ！」
背骨も折れよとばかりに反りかえり、両肩と爪先だけを地につけた姿勢で硬直した。不自然に固まった女体から魂の欠片が翔びだし、堰を切ったように弛緩が訪れる。腰を落としたとき打ち所が悪かったのか、武装のいくつかが外れてしまった。
「……シュナイダー……さま……」
「シュナイダーじゃなくてシュナよ、アリス。あなたの知っている英雄サマは、もうこの世にはいないのよ」
「……うあ……ああ……み、見ないで……あぁ……こっちを……見ないでぇ……」
絶頂の余韻に浸る間もなかった。新たな触手が、男根状に変形して両の乳頭に迫ってくる。反りかえった鰓に、微妙な曲線を描く鈴口。亀頭の尖端には縦の穴まで開けられていて、いかにも物欲しそうにヒクついていた。
『ひさしぶりの聖句、実に艶やかだったぞ……褒美として、おまえが大好きだった洗礼を執ってやろう』
無数の魔手たちが消え、乳首を縛っていた触手がその輪をズルズルと下ろしてくる。双

乳の根本を縊りあげ、乳頭をきつく痼りたたせてくる。
「……もうやめてぇ……あああ、乳首、しないで……」
男根状の触手が真上から乳首を突きつぶし、肉の丘にむっちりとした窪地をこしらえた。それでも終わらずに亀頭の先で肉芽を潰し続けて、
「……あーっ！」
尿道孔の縦穴に、乳首を差しこまされた――亀頭にくわえられた。狭い穴ゆえの締めつけに、乳首が音を立てるほど圧縮される。双乳に男根を突きたてられる屈辱も、覚醒めてしまった官能を残酷に狂わせてくる。
「ああっ、乳首ぃ……ック！」
『もうイッたのか？　まったく、恥知らずの敏さだな。これからが本番だというのに』
闇色の男根が、本体の部分から震える。ささやかな揺れは、肉雁の手前まで波及してきた段になって、その正体を明らかにした。
「……うぁ、あっ？　あああっ！」
男根が、射精時の激しい痙攣をくり返した。
「あーっ！」
尿孔にしゃぶられている乳首はもちろんのこと、亀頭に潰されている乳頭や、窪地に凹まされてしまった双乳そのものが、男性器だけが為しうるいやらしい激震に見舞われる。

刺決とばかりに精液じみた闇が噴きだして、乳首を洗いながし、肉の窪地をネットリとした湖に変えてしまう。
「イクッ！」
頂きに生まれた水溜まりから、名残惜しんでいるかのような鈍さで闇がこぼれ落ちた。むっちりと揺れる乳肌のうえに轍を描き、脇や胸板を濡らしていった。
「シュナっ！　シュナぁ、イクゥ！」
ただひたすら胸だけを苛められ、双乳の悦びだけに狂わされる。その単純さと執拗さが、かえってたまらなかった。自分がいったいどんな境遇に堕ちていたのかを最短距離で思いださせられ、せっかく装っていた鍍金を剥がされてしまう。
「だめぇっ！　ああっ、乳首っ！　乳首に射すのだめぇっ！」
『ほう、なぜだめなのかな？』
「乳首ぃ……シュナぁ、乳首が感じすぎるからぁっ！」
涙の懇願にもかかわらず、乳首への擬似射精は終わらない。熱い闇は緩急と強弱をつけて押しよせ、乳首を液状の強引さで嬲り続ける。おそらくはこちらの虚勢まで溶かし、なけなしの誇りまで流してしまうつもりなのだろう。
「あーっ！　……うああ……あーっ！」
『ふふふ、だいぶ祭肉らしくなってきたな』

さらに無数の触手が海栗のように伸び、女体に絡みついてきた。鎧を外され、衣服を剥がれ、汗まみれの褐色を露わにされた。引きしまった背が、意外に丸みを帯びている尻が、濡れそぼった秘所が、不定形の妄執に舐められ、擦られ、犯される。

「だめぇっ！　そっ、そんなところ、いじめないでぇっ！　あーっ、そこもいやぁっ！　シュナっ、イッちゃうからぁ……ひいっ、乳首やめてえぇっ！」

※

夢を見ているのかもしれない、と思った。

ただの夢ではなく悪夢だ。それもとびっきりタチの悪いヤツだ――目の前で続けられる淫祭を、アリスは呆けた目で眺めていた。

「……イクッ！　ああっ、イクゥッ！」

つい先ほどまで超人的な剣技を見せ、鋼の口調で激語を放っていた女戦士が、ヒルダと同じ痴態をさらしている。

いや、ヒルダよりも救いようのない堕ちぶりをさらし続けている。

ほぼ裸に剥かれたシュナイダーは、もはや淫魔の触手に操られる木偶だった。靴を履いているだけの足を高々と掲げられ、宙にV字を描かされたと思いきや、そのまま百八十度の開脚を強いられて、恥丘の膨れぶりを強調させられる。どこかを動かされるたびに隠さ

れていた肌を見せ、濡れた粘膜を開き、汗でも涙でもない体液を垂れながす。
いまは、籠手だけの両腕を頭の後ろに組まされ、片足立ち――左足を踵が見えるまで引きあげられていた。太腿の裏が、尻たぶも含めて真正面を向き、足の付け根に肉の捻れを与えている。恥丘から肛門に達するまでの胴底が、その複雑な曲面をあますところなく照りかがやかせて、暗がりの肌だけにくゆらしうる独特の匂いを放っている。
『あの三人のうちで、こういう不自然な体位を楽しめるのは……おまえだけだったな』
姦淫聖職者が思い出深げに呟きながら、妖しい質感の闇を泳がせる。細い触手状にして耳や首をくすぐり、平たい舌状にして腋窩や脇腹を舐めまわす。小さな魔手たちは引き続き胸に蝟集（いしゅう）し、あらゆる方向から柔肉を揉みつぶしている。シュナイダーの力強い悶絶と魔手たちの狼藉に挟まれて、どうしようもないほど膨らんだ肉果がこぼれ落ちそうに踊っている。
「……いい加減、もう察しがついたでしょう？」背後の半魔が、諭すように語りかけてきた。「護教と救国の英雄だった私たちに、いったいなにがあったのか……」
「……わかり……ません」
アリスは弱々しく呟いた。
「わからない、じゃなくて、わかりたくない、でしょう？　わかってしまったら……あなたの真っ白な夢が曇ってしまうから」

ルーティエが耳の穴に舌を差しこみ、股布のなかに居座らせ続けている手を戯(あざ)してきた。人差し指と薬指が、肉の花弁を左右にわけて、未開の地を外気にさらさせる。軽く曲げられた中指が、ヒクヒクしている亀裂に潜りこんでくる。

「……ひあっ！」

革手袋のしなやかな触り心地に、恥骨まで含めた舟底部がおかしくされていた。不必要に緊張、あるいは弛緩してしまい、いままであることすら知らなかった筋肉を勝手に蠢かせてしまう。

「五人とも全員生きていて、三人は淫魔の慰みものにされ、一人は淫魔の手下になり、そしてもう一人は皇帝に……本来なら成れるはずのない、帝国初の女帝に成った」

頭のなかに指の姿が浮かびあがる。ほっそりとした幻像は尺取虫のようにくねり、ある種の華やかさをまとって脳の皺を解(ほぐ)してくる。

「女帝はその後、女だけの騎士団を作った……そして定期的に現れる魔族に対し、尼僧と組ませて『覚醒軍』なる小部隊を送りだし続けた……」

頭のなかの指が、しまいこんでいた記憶をでたらめに引きださせ、アリスをますます混乱させる。怒濤のように移る時間軸が、ある一点を引きあてる。

――ふふふ、今月の貢ぎ物は大当たりですねえ。

あのとき、姦淫聖職者はそう嘯(うそぶ)いていた。

「……ち、ちがうっ！　ちがうぅっ！」

自分はいったい、なにに反対しているのだろう？　とにかく、囁き声と指技から逃れたかった。力の入らぬ手足を繰り、死に物狂いで藻掻く。両肩を怒らせて首を突きだすような格好になった途端、シュナイダーの獣声に張りとばされた。

「狂っちゃう！　シュナっ、シュナぁ、おかしくなっちゃう！」

女戦士が凌辱されているのは、もちろん、目立つモノをぶら下げている上半身だけではなかった。たくましさの香る背にも、腹筋の浮かんだ腹にも、上下割りされている股にも、ネトつく悪夢は群がっていた。

闇の塊は小水を漏らしたかのごとく濡れた内腿を舐めまわし、ムリな姿勢ゆえに震える足の付け根を擦りたてる。細い触手となって慎ましい草叢（くさむら）を撫であげ、平たい舌となって罪の芽を揉みつぶす。そして、男性の有り様となって――。

『いいぞ、おかしくなるがいい。ほれ、おまえはここが好きだっただろう？　こうして子宮の入り口を小突いてやるたびに……』

「あーっ！」力強い痙攣が、掲げられた左爪先と垂らされた右爪先、いちばん上といちばん下を何度も往復している。「奥ぅ！　おっ、奥にあたってる！」

『……ふふふ、艶やかな声で父を讃えてくれたな？』

「刺さってる！　太いのが刺さってる、あたってるぅ！　ああっ、あーっ！」

『さあ嘉(よみ)せよ、褒めたたえよ』
男性の有り様となって、女性の控え方を――。
「だめっ！　ああっ、だめ……」
女性の控え方を、刺しつらぬいている――。
「……イクッ！　シュナっ、イクイクイクゥッ！」
「ずいぶんと熱心ね？」
ヒルダに続き、これで二度目だ。臭気と汁気に満ちた罪の現場を見せつけられ、アリスはまたもや硬直してしまった。あっけなく腕を極めなおされ、ルーティエを背にしたまま仰向けに寝転がされた。
割とふくよかな乳房に抱きとめられ、半魔の体臭に包みこまれる。麝香(じゃこう)じみた甘みの陰には、どことなく物悲しい刺々しさが混じっていた。
「安心して。あなたにも、すぐアレを味わわせてあげるから……あのエセ坊主のモノなんかじゃなくて、あの人のモノを……ここに……」
しなやかな中指が、さらに奥へと潜りこんでくる。無数の層を為している粘膜がよりわけられ、自分でも触れたことのない内部を擦りたてられる。
「……ああっ、いやぁっ！」
身体のなかを犯されているという強烈な異物感と、聖なる戒律を破られたという背徳の

念が、どうしようもなく鼓動を爆ぜさせた。頭が熱狂のうちによろめいて、信じられない高さの叫び声をあげてしまう。

「……さすがに正真正銘の鏡はキツいわね。嬖たちの初々しい反応もステキだわ」

ほんの少しだけ感じていた痛みは、たちまち快感の泡立ちに変えられていた。指先をかすかに動かされるだけで、恥骨が金属的な軋みをあげる。粘膜と指の隙間から熱い液体があふれだす。

「それに、なかなか敏感ねえ。濡れやすいし、素質がありそう……これなら、すぐ見つけられるわね」

指先が何かを探っているように蠢き、天井の一点に達したところで止まった。指の腹でそこを圧迫された瞬間、アリスは反射的に息を詰まらされてしまい、両手の指先まで強ばらせ、ただ下唇だけを上げ下げさせていた。生々しすぎる余韻が過ぎさったあとで、やっと囁き声を搾りだした。

「……あ……あれ……なに……な、なにが……」

中指が再び、その部分を押してきた。

「……きひぃっ！」

痛くなるほど瞼を閉じ、両手を握りしめる。暴風のような混乱を乗りきると、意識が勝手に、異物のことを調べ始めていた。指の腹は泥濘（ぬかるみ）のような粘膜を掻きわけて、その表皮

に浮いているもの――おそらくは血管だろうと思われる出っぱりをあやしてくる。
「うふふ……私が触っているのはね、罪の芽に負けず劣らず悪魔に縁のある場所なのよ」
指先がゆっくりと動きだして、やたらと存在感を主張する筋を引っかき、粘膜の天井をえぐってきた。
「あ、悪魔に……ひあああっ！」
アリスの絶叫にかまわず、指責めは速められ、強められた。禁じられた聖地の奥で鉤形が作られ、狭い洞窟をムリにくつろげられる。肉壁たちの反発は、そのまま天井を押しあげる力に加えられてしまい、ルーティエの指先が深々と弱点をえぐり抜いてくる。何かの導火線じみた血管を好き勝手に弾きまわされ、アリスは無我夢中で腰を踊らせていた。
「ひあっ、あっ！　あっあっあっ！」
グチュグチュ、と聞くに堪えない粘音がする。螺旋十字の護りを縫いつけられているはずの股布が、いつのまにか豪雨に打たれたみたいに濡れそぼっていて、足や腰を動かすたびにいやらしい悲鳴をあげる。
「ああっ、なんでぇっ？　ど、どうしてっ！　どうして、こんなっ！　こんなにぃ……」
「……こんなに？　こんなに何かしら？」
ルーティエの左手が脇のしたから這いあがり、乳房をすくいあげてきた。経験豊かな手つきで揉みこまれて、乳頭を膨らまされる。充血しきった乳暈を伸び縮みさせられ、小石

の硬さになった突起を人差し指で下から上へと弾きあげられる。
「こんなに……気持ちいいでしょう？」
アリスの痴態は荒っぽくなり、時々ルーティエから落ちるほどになった。寝台役は暴れる腰を冷静に抱えなおし、急所を容赦なく穿（ほじ）ってくる。
アリスが全身を激しくしならせるつど、下腹に何かが召喚されていった。切羽詰まった危機感、じっとしていられない狂おしさ、さらには熱を持った重みが溜まっていった。
「ちがっ、き、きもちよくな……」
その違和感にすすり泣きつつも、必死に反駁しようとした途中で、
「……あーっ、いいっ！　きっ、きもちいいーっ！」
英雄の屈伏に遮られてしまう。
「……そんな……シュナイダーさま……」
さらには姦淫聖職者が言うところの「聖句」――脳天から飛びだしているような絶叫でダメ押しされ、新参騎士は何も言いだせなくさせられてしまった。
（……悪魔にいやらしいことをされているのに）
自分もシュナイダーも、秘すべき門を開けられ、封じるべき穴のなかに潜られ、罪深き地を責められている。つまり女の咎（とが）を掘りかえされている。
（そのはずなのに……）

しかも、シュナイダーは自分のように、細い指で穿られている――聖なる鏡を割られずともすんでいるのではない。男根状の三本、
「ああっ、イッちゃう！　またイッちゃ……」
牛の足くらいはありそうな触手たちに、代わる代わる貫かれている。一本が出てきたら間を作らずにまた一本、入れかわり立ちかわりで犯されている。
「……イクッ！　イクイクイクゥッ！」
濡れた肉を叩き、ひしゃがせる音が矢継ぎ早に聞こえる。その音の狭間に秘肉の蜜が噴きだし、湯気と匂いを振りまいている――。
「ほら見えるでしょう、聞こえるでしょう？　あの英雄サマでさえ狂っているのだもの、あなたが気持ちよくなっても、誰もおかしいとは思わないわ」
ルーティエが指で秘穴を穿り、掌で恥丘を揉みこんでくる。拇指球（ぼしきゅう）の盛りあがりが、ちょうど罪の芽を押していた。包皮のうえから摺りつぶし、覚醒めたての性感にぴったりの加減で苛んでいた。
股間から押しよせてくる刺激が強すぎて、つい目を閉じてしまった瞬間、中指と掌が互いに押しあい、悪魔と罪を一緒に爆ぜさせてきた。
「あ……っ！」
長い睫毛が跳ねあがり、焦点を失った瞳が緩やかに流れる。背筋が反り、大きめな乳房

の控えめな乳首が、四方八方を指してまわった。汗まみれになった腰が急角度で折れ、秘唇が指を締めつけて粘っこい音を立てる。その締めつけがまた、魂を震わすほどの快楽を搾りだしてきた。

「……うあ……あああ……！」

これまで月に一度しか存在を意識しなかった穴が、アリスの意思とは関係なく蠢いて、勝手に悦びを貪っている。あたかも何かが巣くってしまったみたいだった。女体独自の暴走が聖なる教義と結びつけられて、信仰心豊かな女騎士に悪魔の憑依を疑わさせる。

「……ああ……わたし……こ、このままじゃ……」

ヒルダの崩壊、シュナイダーの豹変、どれも悪魔のせいだと思う。いや、そう思いたい。あれは、あの淫らな顔やいやらしい声は外からやってきたものだ。自分たちのなかに元からあったなんて認めたくない。

「……悪魔に憑かれちゃうかしら？」

ルーティエは、お見通しと言いたげに笑った。

「エフィもそう言っていたわ……ここに悪魔が棲みついてしまう、って」胸を弄んでいた左手を滑らせて、下腹の微妙な部分、子宮の真上あたりを撫でまわしてくる。「もっともエフィの場合、悪魔はすぐに……お尻へ引っこしていったみたいだけれどね」

右手の掘削はますます貪欲になった。中指だけでなく人差し指まで参戦させて、アリス

の罪深き地を掻きむしってきた。
「……あーっ！」
立ちのぼる粘音が、悪魔の舌なめずりに聞こえた。眉間の奥がグニャグニャに攪拌され、視界までもが歪んでいった。
「うふふ、いまのあなた……シュナイダーそっくりの顔と声をしているわよ？」
「……！」
何か大切なものが切れた。アリスは腰を浮かせて、髪の毛先まで硬直させていた。
「うわあああああーっ！」
心壊れたように叫んで、ようやく背筋を緩ませる。身体をバラバラにされてしまいそうな解放感に、歯を食いしばって耐えるものの、ついに息切れを迎えて、ひたすら泣きわめいてしまう。そんな狂態などおかまいなしに、ルーティエは指を繰り続けてくる。
「あーっ、あーっ！　あああーっ！」
アリスとシュナイダー、騎士と戦士の嬌声が、尽きることなく輪唱される。まともな人間が一人もいなくなった城に、悪魔の賛歌が朗々と響きわたっていく――。

※

褐色の女体を散々に揉みこみ、突きあげ、魂を翔ばさせて肉の復讐を果たすと、姦淫聖

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/